

「見たり、聞いたり、探ったり」No.273 通算 No.424

青 木 行 雄

「春白若宮遷座祭」(奈良県春日大社内) 第60次式年造替「若宮奉祝祭」に参列 (令和四年十月二十九日午前十時執行)



春日大社本殿の前。この裏に四柱の神様が鎮座している



若宮の本殿、新装になった社殿は春日の森に色鮮やかによみがえった

2022年10月28日の夜7時すぎ、静まりかえった奈良県、春日の森にかがり火が灯された。普段は外灯も所々にあって深暗ではないが、この夜は暗かった。それでもNHKの生放送が特別に放送されることから適所に明かりをつけたようである。

遠くから見るこのかがり火がわかり易く言うと「若 宮様」(神様)の御引越しなされたその明かりであった。

資料から説明すると、およそ900年間途切れることなく続く「大和一国を挙げての大祭 - 春日若宮おん祭」で知られ、「大和国の総鎮守」また「芸能の神」とも称される、春日大社の摂社・若宮が20年に一度の式年造替を迎え、2021年(令和3)4月に御本殿から御仮殿となる移殿に若宮様をお遷しする仮殿遷座祭(外遷宮)が行なわれた。

そしてこの11月28日本殿遷座際(正遷宮)が行こなわれたのである。



春日若宮遷座祭による神様の御引越しを生放送する 為のNHK車が、春日の森に駐車中



深暗やみの春日の森にかがり火が灯された。神様の ご引越しである

春日若宮様の説明をする前に本宮の春日大社、四柱、 御祭神をくわしく説明しよう。

第一殿、武甕槌命(たけみかづちのみこと)様

第二殿、経津主命(ふつぬしのみこと)様

第三殿、天児屋根命(あめのこやねのみこと)様

第四殿、比売神(ひめがみ)様



768年(神護景雲2)11月9日



春日の森に数十台の車が駐車されている 若宮様の御引越しに関係する人達の車である

鎌倉初期に書かれた現存最古の由緒記『古社記』には、四所神殿の創建を奈良時代、称徳天皇の768年 (神護景雲2)11月9日とされている。藤原永手が左大臣として活躍した時代であった。

ご由緒

春日の神々の御鎮座は奈良朝のはじめ、平城京鎮護のため、まず「武甕槌命」様を鹿島から(茨城県)から奈良・春日御蓋山頂に奉遷して祭られていたが、それから数十年後、768年(神護景雲2)に藤原氏の血を引く女帝、称徳天皇の勅命により、左大臣藤原永手らが現在の場所に神殿を創建して、さらに香取(千葉県)の「経津主命」様、枚岡神社(大阪府)に祀る藤原氏の遠祖・「天児屋根命」様と「比売神」様の四柱を併祀したのがその始まりとされている。

その春日大宮四柱の神様のうち、第三殿の「天児屋根命様」、第四殿の「此売神様」、御夫妻の御子神様として、平安時代中期となる、1003年(長保5)に御誕生なされた神様が若宮様である。その後、春日大宮で五番目の御本社格の神様(立所御子)としてご一緒に御祀りを申しあげておった。それから時を経て1135年(長承4)、時の関白・藤原忠通公が中心となり、白河上皇、鳥羽上皇歴代のご要請、お心遣いを賜り、社会の安定と人々の幸せを実現するため、御本社(大宮)の南方100メートルの御蓋山麓の浄地に新たな御社殿を建立し、遷御、御祀り申しあげたのが若宮社の始まりとされる。

往時、気候不順による凶作や疫病の蔓延のため苦しんでいる人々の救済に若宮様は絶大な御霊験を発揮され、全ての禍い事を祓い去り、その御加護により好天にして作物豊穣となり、万民ことごとく歓喜し踊ったと記されている。

若宮社御創建の翌年の1136年(保延2)、関白藤原忠通公が天下泰平、五穀豊穣、万民和楽を願い、創始された祭儀が「春日若宮おん祭」である。

この祭礼は大和一国を挙げて執り行われる大祭として887年間、途絶えることなく毎年奉仕されている。御神前に奉納される数々の神事芸能は国の重要無形民俗文化財に指定され、現在でも1千人に及ぶ人々の参勤奉仕があり、加えて50頭もの馬が市内を渡るなど、日本を代表する祭礼として10万人を超える参詣者で賑わうという。

生きている日本芸能史と言われ、松の下式をおこなう表参道の「影向の松」が能舞台の鏡板の源、また

御旅所祭の芝舞台が「芝居」の語源ともされている。

このように天下国家の安泰を祈願する神社として創 建されたが、同時に個人の願いをも御聞き届けいただ く初めての神社として有名である、と書かれている。

古来より伊勢の神宮などの国家の安泰を祈願する神社は「私幣禁断」とされ、春日大社も同様であるが、若宮御本殿前には神楽殿が設けられ、常駐する御並により個々人それぞれの願い事を託した御巫神楽が奉納された。このことが大変な人気となり、神楽鈴の音は終日止まず、永延と若宮御社頭に鳴り響いたとのことである。

そして現在、この若宮神楽殿は、日本最古の神楽殿 として重要文化財に指定され、舞われていた御巫神楽 は今もなお「社伝神楽」として継承され、年中の祭典で はかかさず奉納されている。

此くのごとく絶大な御力を発揮され、篤い崇敬が寄せられてきた若宮様は今日では人々の生命力を増進させ、正しい知恵を御授けくださる神様として知られる日本を代表する神社となった。

若宮様の御造替は御子神ゆえに大宮と同格の御社と して20年に1度の式年の制で大宮と同日に執り行なわ れてきた。

しかし、明治政府の管理となってからは、若宮社は 御本神格の摂社に位置付けられたために式年とはなら ず、以降、御修繕のための不定期な形で御造替が行こ なわれてきた。明治16年、大正9、10年、昭和25年、 昭和39年、平成14年と近現代120年余りで5回の御造替 奉仕にとどまり、特に前回の平成14年までには昭和39 年より38年もの長期間に及びました。

このように明治時代以降は、20年に定まらない不定 期な形で若宮様には大変申し訳ない失礼な状況が続い ていたが、今回より20年に一度の式年造替へと戻して とり行なわれる事になった。



神様の移動はどこの神様も夜中ときまっている。始めてNHKで生放送された



若宮様の神殿前、生放送による明かりが目立つ



このなかに神様がいて、移動中である。人間が3人 くらい入れるスペースという



夜中の移動であるが関係者も大変のようである

次

神饌

グラ供ス

此間奏楽

次

御

扉

ラ開

此間奏楽

諸員平伏磬折

次

再拝拍手

目まぐるしく変わる現在の世の中において千年前の儀式をそのまま再現する祭典はレトロそのままで 表現も大変難しい。

中間に、「興福寺貫首以下僧侶」とあるが、春日大社のすぐ下方に「興福寺」があり、昔は神仏同共で あったが明治時代に別れる事になった、春日大社と興福寺は深いつながりがある。

次

次 次 宮司奉幣

宮司祝詞奏上 此間諸員平伏磬折 参列者参進 若宮所定ノ席ニ著ク

先

宮司以下祭員奉仕員参進 二ノ鳥居ヲ経テ

祓戸神社所定ノ位置ニ著ク

畢リテ若宮へ進発

次

修

祓

次

次

参列者代表玉串ヲ奉リテ拝礼

次 御幣ヲ撤ス

神饌ヲ撤ス 此間奏楽

御扉ヲ閉ツ 此間奏楽 諸員平伏磬折

次

神楽ヲ奏ス

次

次

再拝拍手

次 宮司以下退下

令和四年十月二十九日 午前十時執行

第

六

+

次式年

·造替

昨宵、 新装の若宮御本殿に還御遊ばされる式年造替一連の最重儀であります「本殿遷座祭」が滞りなく

調度品の調製など若宮様の御心に叶うよう執り進めて参りました。 奉仕叶いました。今次式年造替では令和三年四月二十三日に假殿遷座祭が斎行されて以降、皆様方の ご協力のもと御殿の御修繕、 周辺整備をはじめ御神宝「金鶴及洲浜台」、「銀鶴及磯形」の復元や殿内外の

ご縁の深い興福寺貫首以下僧侶の方々により神前読誦いただきます。皆さま方も若宮様の還御を心静かに 本日の奉祝祭は若宮様のこの慶事をお祝い申しあげる祭儀で、特に若宮祭(春日若宮おん祭)においても

次 興福寺貫首以下僧侶 神前読誦

般若心経



若宮奉祝祭に参列の皆様。 若宮社殿へ移動中の列



本殿より100m程の所に若宮殿があり移動中 両側に灯籠が春日には千体程あるという



式典に参列の皆様。コロナ禍の中全員マスク姿である



若宮様の式年造替による儀式の様子

2022年(令和4)10月29日(土曜日)奈良新聞にこのような記事が載ったので記してみる。

「佳子さま、春日大社参拝」

(式年造替の春日若宮遷座祭へ)

秋篠宮家の次女佳子さまが28日、来県され、奈良市春日野町の世界遺産、春日大社で営まれる式年造替(しきねんぞうたい)の「春日若宮遷座祭」参列のために同大社を訪問された。佳子さまの同大社への参拝と、皇族の遷座祭参列は初めてとなる。

同日午後2時半頃、佳子さまは、水色の参拝服姿で、花山院弘匡宮司の案内で本社本殿、年式造替中 にご神体を祭る若宮仮殿を参拝。

その後、ピンク色のスーツに着替えられ、同日夜の遷座祭を前に修理を終えた若宮本殿を視察された。 佳子さまは、本殿の朱色の鮮やかさや、日本最古の神楽殿の説明に熱心に耳を傾けられていた。

「天児屋根命」(あめのこや ねのみこと)を祭神とする同大社の摂社、若宮神宮は20年に一度の修理事業「式年造替」が進められ、9月末に竣工を迎えた。

同日午後8時頃からはご神体を仮殿から本殿に戻す遷座祭が営まれ、佳子さまは玉串を奉納された。

以上のような記事が掲載されていた。

28日の午後、近鉄奈良駅からタクシーで奈良ホテルに向かったら、ホテルの館道に出迎えの人が多勢並んでいて、えらい歓迎ぶりだとびっくりしたら、なんとすぐ後に佳子さまが到着で、またまたびっくり。感動の連続であった。

このコロナ禍での3年あまり行動の自粛をしいられ、感動の少ない日々であった。

まだ終息はしていないが、人生多少は場合により粗 行も必要かも知れない。

というわけで、時々感動を求めて、行動を優先しは じめたが、どこに行っても、そんな人が多くなったよ うな気がする。

人生を重ねると感動が少なくなる。感動の回数が多い程、人生に重みが増えるような気がする。それには 人に会い笑顔や、素晴らしい風景や旅が必要であるように思う。高齢者の皆様がんばりましょう。

2022年11月23日 記

参考資料

春日大社社務所発行誌 NHKテレビ 奈良新聞



奈良ホテルの玄関、秋篠宮家の次女佳子様を迎える 為、赤の絨毯を敷く玄関先



赤の絨毯が目立つ奈良ホテルの玄関



奈良ホテルの玄関の中、佳子様の通る階段を通行止 めにしてあった